

山梨県の日本住血吸虫症の現状

—地域別に見た皮内反応の変動—

堀見利昌 薬袋 勝 梶原徳昭

本間久子 中山 茂

はじめに

山梨県の日本住血吸虫症は近年減少しつつあって完全撲滅も夢ではなくなった。県では「地方病撲滅対策7か年計画実施要綱」を立案して昭和54年度から実行にうつし昭和60年には無病地の宣言をする予定で意気込んでいる。日本住血吸虫症の患者検索として、県では昭和43年から皮内反応検査を実施してきている。さきに久津見ら¹⁾は47年の成績を報告しているが今回53年の成績をまとめて47年と比較検討を試みた。

調査方法

皮内反応検査には農耕従事者を対象に Melcher 抗原を使用して5,000倍と15,000倍希釈液を注射,15分後に計測して膨疹径9mm,発赤径20mm以上を陽性に判定している²⁾。47年との比較は5,000倍の成績を用いた。

甲府盆地の有病地は47年に準じて東部と西部に分けた。47年当時は市町村数が東西相半ばしていたが53年までに山梨市,春日居町,豊富村,三珠町は有病地を解除されてしまった。現在は7市町村であるが,甲府市の有病地は市街化して,受診者の大部分が農耕従事者でない理由で今回は東部より除外した。西部は47年と変わらないが,中富町の有病地は飯富1部落となり,甲府盆地とは離れているので除外した。

調査成績

1. 市町村別成績

表1に市町村別の成績を示した。東西に分けてみるとそれ程の差が認められなくなってきた。東部の一宮町は有病地2部落であるが,すでにほとんど衰退してしまっている。御坂町,石和町がこれに次いで衰退してきている。八代町,境川村,中道町は西部とほぼ変りない。

西部で玉穂村,双葉町の男性の陽性率は50%をこえている。次で八田村,韭崎市の男性が40%をこえている。他の町村は20—30%台であって東部との差はない。40%をこえる4市町村で15,000倍の陽性率を見ると,玉穂村8.0%,八田村13.6%,韭崎市6.7%で5,000倍との差

は大分開いているが,双葉町は22.1%と高いことは注意すべきである。

女性の陽性率は男性よりも低く,全県で20.3%,東部で15.2%,西部で21.3%と低く,男女の差がはっきりと認められる。

表1 市町村別皮内反応陽性率

対 象	男		女		男女合計	
	×5000	×15000	×5000	×15000	×5000	×15000
石和町	25.9	2.8	6.1	0	15.8	1.4
一宮町	0	0	3.0	0	2.0	0
御坂町	17.9	1.8	5.0	0	12.5	1.0
八代町	36.7	10.2	17.7	2.1	27.3	6.2
境川村	34.3	2.9	16.9	1.5	23.0	2.0
中道町	35.3	2.9	21.6	1.4	27.2	2.0
県東部平均	29.3	4.3	14.1	1.0	21.0	2.5
玉穂村	53.3	8.0	19.0	1.8	32.2	4.2
昭和町	33.0	1.1	12.3	0.2	20.5	0.6
田富町	34.1	7.6	7.6	1.3	17.0	3.5
竜王町	27.5	2.8	10.9	1.9	14.1	2.1
敷島町	21.5	5.5	12.2	2.5	15.8	3.7
八田村	42.1	13.6	17.4	4.1	25.8	7.3
白根町	26.7	5.1	11.9	3.5	16.4	4.0
若草町	33.8	16.7	13.2	3.8	20.9	6.5
甲西町	30.7	6.7	13.2	3.3	21.2	4.9
韭崎市	40.5	6.7	21.8	1.7	28.1	3.4
双葉町	57.3	22.1	27.5	7.3	35.3	11.2
県西部平均	35.7	8.5	14.4	2.7	21.5	4.7
全 県 平 均	34.7	7.9	14.4	2.6	21.4	4.4

2. 年齢別成績

表2・図1～3に成績を示した。市町村別では東西の差、男女の差はそれ程でなかったが、年齢別になると、明らかになってくる。

図1は全県の男女別陽性率の成績である。男性は47年には40才に陽性率のピークがあり60%であったが、53年には45才がピークで43.4%となり約17%の陽性率の低下年齢は5才上昇している。

女性の陽性率は、47年が55才にピークがあって29%、53年は65才がピークで22.0%で陽性率は7%の低下、年齢は10才の上昇が認められる。

図2は東部の年齢別の成績である。男性は47年に年齢40才、陽性率50%がピークであり、53年は50才、39.7%がピークであって陽性率の低下約10%、年齢差10才である。一方女性は47年に55才、29%の陽性率であったのが53年には70才、23.5%であって、陽性率の低下約6%、年齢差は15才である。

図3は西部の年齢別の成績である。男性で47年には40才にピークがあり陽性率は65%、53年は45才がピークで46.5%の陽性率で、年齢差は5才、陽性率の低下は約19%である。女性は47年に60才にピークがあって49%の陽性率、53年には65才がピークで22.5%であり陽性率の低下は約27%、年齢差は5才の上昇である

以上の成績から、東部は30才以下の若年層には男女と

も陽性者は認められなくなっている。陽性率の低下は西部に比較して少ないが、陽性率のピークの現われる年齢が47年から53年の7年間の経過年数以上に男女を通じて10—15才も高齢化しており、東部の有病地は急激な衰退の傾向を示している。西部は陽性率の低下は著しく7年間で19—27%も低下しているが、年齢の移行は5才しかない。若年層では20才台で男性には陽性者が認められなかったが、女性にみられた。男女の間では、東部、西部

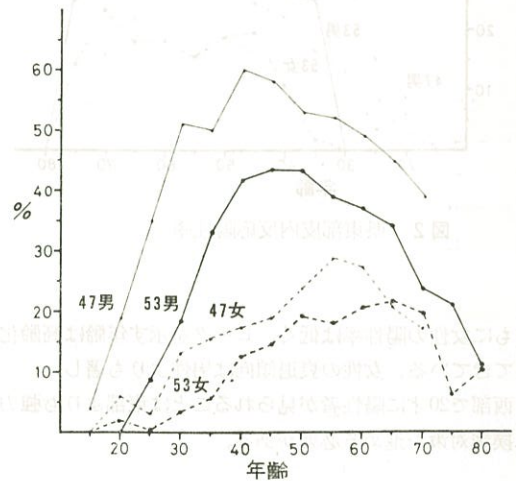


図1 全県年齢別皮内反応陽性率

表2 年齢別皮内反応陽性率

年 齢	県 東 部			県 西 部			全 県		
	男	女	男女合計	男	女	男女合計	男	女	男女合計
80才～	0	0	0	13.9	10.3	12.3	11.4	10.3	11.0
75才～	25.0	14.3	21.7	21.4	5.9	12.9	21.9	6.3	13.9
70才～	29.2	23.5	25.9	23.7	19.4	21.2	24.4	19.9	21.8
65才～	33.3	18.0	24.4	34.3	22.5	27.0	34.2	22.0	26.8
60才～	31.0	18.1	23.9	38.4	21.4	27.7	37.3	21.0	27.2
55才～	35.0	15.6	23.1	39.8	18.6	25.1	39.2	18.4	24.9
50才～	39.7	18.8	29.1	44.2	19.6	28.0	43.5	19.5	28.0
45才～	31.9	19.6	25.8	46.5	14.3	25.2	43.4	14.9	25.5
40才～	26.2	10.6	18.0	44.9	13.2	23.4	41.9	12.9	22.7
35才～	25.0	1.9	10.1	37.8	6.2	14.4	35.7	5.8	13.8
30才～	0	0	0	20.4	3.7	7.8	18.4	3.5	7.2
25才～	0	0	0	9.8	0.4	2.7	8.7	0.4	2.5
20才～	0	0	0	0	2.0	1.3	0	2.0	1.3

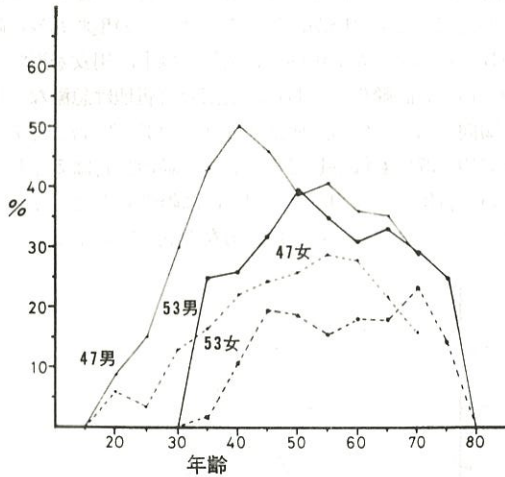


図2 県東部皮内反応陽性率

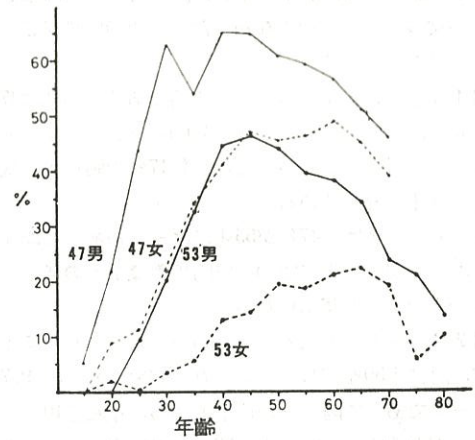


図3 県西部皮内反応陽性率

ともに女性の陽性率は低く、ピークを示す年齢は高齢化してきている。女性の衰退傾向は男性よりも著しい。

西部で20才に陽性者が見られることは東部よりも強力に撲滅対策を進める必要がある。

ま と め

昭和53年の皮内反応陽性率を東西に分けて比較した。市町村別では一宮町のみはっきりと衰退した事を認めるが、その他の市町村は東、西でそれ程の差が認められない位に陽性率は低下してきている。年齢別では東部は男女とともに30才以下で陽性者がなく、経過年数以上に陽性率のピークは高齢化して明らかに衰退してきている。

西部は陽性率の低下こそ著しいが、陽性率のピークの移行は経過年数よりも少なく、20才台にも陽性者が認められ衰退はしているが、その速度は東部よりもゆっくりである。

校閲を御願した高橋修和所長に感謝の意を表します。

文 献

- 1) 久津見晴彦ら：山梨衛研年報，16，71—73（1972）
- 2) 石崎 達，飯島利彦，伊藤洋一：寄生虫誌，13，387—396（1964）